

先人の知恵 “寒だめし” の読み方、農事への活かし方

● 白鳥 文雄さん

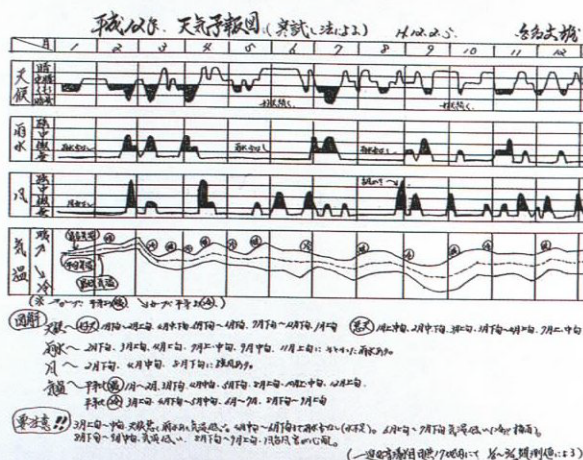


【出会い】昭和55年から3年続きの冷害を経験し、何とかして「年間の天候を予測できないか？」と思っていたところ、昭和62年に桜川豊吉氏（故人）の“寒だめし”にめぐり合い今日に至る。

【手法】通称「寒の内」といわれる小寒～立春まで30日間の天候を観測し、これをその後の1年間に当てるという、今どき非科学的と一笑されそうな手法ですが、大まかな傾向としては、当たる確率が高く、身近な人たちにも喜ばれている。

【活かし方】米：減数分裂期のずらし、水・肥料の加減など。菊：花芽分化期のずらし、水・肥料の加減、温度の調節など。

【“寒だめし”を通して】先人たちは、動植物と同じように、研ぎ澄まされた予知能力を身につけていて、天候のみならず『宇宙のいのち』とも共振していたのではと、近年思うようになった。



● 徳永 光俊さん



昭和27年生まれ。京都大学農学部農林経済学科卒。現在大阪経済大学日本経済史研究所長。農学博士。主な編著書、『日本農書全集』第Ⅱ期、『日本農法の水脈』（農文協）、『20世紀の経済と文化』、年版『経済史文献解題』（思文閣出版）。

数年前、白鳥さんとお会いした時の衝撃は忘れられない。どぶろくではない。寒だめしの天候予測だ。その後の東北・北陸行脚の幕開けだ。「農藝」の名人たちを訪ね歩きながら、私の修行は続く。